

---

# オオトリ短編劇場

オオトリページ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オオトリ短編劇場

### 【Zコード】

N4070E

### 【作者名】

オオトリページ

### 【あらすじ】

作者オオトリの駄作な短編小説集！！ 第1作・変な黒猫の話  
第2作・押し掛けで来た鬼のお嫁さんのお話 第3作・死神貴族な  
お話？

## 我が家（前書き）

短編集第1駄！！

我が家なんてタイトルですが、猫の話です。

「おーんな、猫はいかがでしょつか？」

では、本編へどうぞ！！

## 我が家

吾が輩は、考える猫である。答えはまだない。

「ちょっと、ゆか～？ また、深夜外泊なの～？ いい加減にしないと、お父さんに本当に怒られるわよ～？」

「うひさいなあー…、別にいいじゃーん？」

吾が輩は飼い猫である。名前はチビ。

主人である少女が、まだ幼い吾が輩を拾つてくれた折りに、付けてくれた名前である。あれから、いく月年の時間が流れ、体の大きくなつた吾が輩には、もはやそのチビといつ名前は不相応となつている。が、吾が輩はチビである。

「よー、チビすけ～？ あんた、また、私の後ろを付け回して～

? いくら、命の恩人だからって、それストーカーだよ~?」

吾が輩をそう言つ女性は、かつて少女と呼ばれた吾が輩の主人である。名前は、小山内 由香<sup>おやない ゆか</sup>。もちろん、こちらも名前の通りの幼い姿は、当の昔である。

彼女はいま高校二年生。吾が輩が拾われたのが、彼女がまだ9つか10の時だった為、もうかれこれ6~7年の付き合いである。

「よつしょ、と…。あんた、ぶちやい顔になつたわね~? 昔はチビすけの名前の通り可愛かつたのに…」

まつたくもつて、放つておいて欲しい話である。確かに吾が輩は、もはや、可愛いといえる幼猫では無い。だが、卓越された渋みという個性がある。ぶちやい顔だって、立派な猫なのである。

「もう、フーフー鳴かな~い。悪かつた悪かつた、悪かつたって…。ほれ、頭よしよし?」

さて、主人はいましがた吾が輩を幼猫とは違い、可愛いくないと申したはずだが? 幼猫で無い吾が輩が、こんな、子ども騙しのご機嫌取りで、卓越された渋みの大人猫の吾が輩が、喜び鳴くとでも…?

「あつ、じりり、ペロペロ舐めない。あははは、もつ、分かつ分かつた。嬉しいのね、分かつた分かつた…」

吾が輩は別に喜び鳴いた訳ではない。代わりに喜び舐めたのだ。断じて嘘つぱちなどでは無い。……文句あるか？

ペロペロペロコン、ペロペロペロコン…

と、そこで聞き慣れた音が、吾が輩の超越された耳に響く。まったくもつて、うるさい。この、『ケイタイ』という最近の主人のお気に入りのペットは、まったくもつて、うるさい奴である。

このケイタイという奴が来てからというもの、主人は、このケイタイに付きつきりである。朝起きれば直ぐおま手で撫で上げ、夜寝る前はいつまでも手にして離さない。

別に、別に吾が輩は嫉妬などしていない。吾が輩は、もうよい歳の大人猫である。だから、大人として分相応の思慮と行動の出来る猫なのである。

いくら、ケイタイが話しかけても答えない無口で無愛想な奴だとしても。いくら、ケイタイがせっかく主人が用意した首輪を、ぶらぶらとだらしなく横頭に付けて有り難みも感じない奴だとしても。いくら、主人が長年の連れである吾が輩より、ケイタイを連れ、外で散歩をしていようとも……。

吾が輩は怒りはしない。吾が輩は怒鳴りはしない。吾が輩は主人に抗議などしない。

「あー、うんうん。分かった分かった、じゃ、30分あとに角ファミレスでー…」

むつ、またである。また、主人は吾が輩を置いて、まだまだ新参者のケイタイを連れて外へと出掛けた。ケイタイが来て約1年。吾が輩が来て約6～7年。この差は歴然だ。つまり、吾が輩とケイタイでは立場が違う。吾が輩が、この家のペットの年長者であるなら、奴は新入り。だが、主人は常にケイタイを離さない。

ふふん、だがな、ケイタイよ。吾が輩は知っている。吾が輩は分かっている。お前は、もう直ぐ居なくなる。お前は、もう直ぐ主人に捨てられる。

前のケイタイもそうだつた。前のケイタイも同じように、うるさく鳴くクセに、普段は無口無愛想な奴だつた。だが、やはりそれでもそいつは、主人のお気に入りとなつていた。だが、だがである。ふふん、だが、そいつは1年も経たない内に捨てられたのである。

その前の奴も、その前の奴も、そのまた前の奴も……。

ふふふん、そこが吾が輩とお前たちの違いである。吾が輩はこれが  
らずつと主人と一緒に。付かず離れずだが、ずっと一緒にである。だが、  
貴様はあと数日。遅くとも数月の内には主人に捨てられる。

吾が輩は、得意満面である。吾が輩は、大人なのでいくらケイタイが主人から可愛がられようと怒りはしないのである。ふふん、吾が輩、ブイツ！－なのである。チョキではなく、ブイなのである！－

「あ～、もう1つのケイタイも飽きたなあ……」

だが：

「よし、また新しくケイタイ買おーっと…」

だが、吾が輩の悩みは尽きない。そう、前のケイタイが居なくなると、次のケイタイがやつてくるのだ。その前も、その前も、そのまた前も…。悩ましいのである。考えるのである。そう、だから…

吾が輩は、考える猫である。答えはまだ無い。

## 我が家（後書き）

こんなのは。

どうだったでしょ？まあまあ面白く読んで頂けたでしょうか？

まあ、そんな訳で、こんな感じの短編的な話を次々に掲載していくつもりです（笑）

まあ、ほとんどが駄作（いつも？）という感じなので、第駄！！  
みたいな訳です（笑）

タイトルの通りに、限りないに近く。つまり、有るよつて無いよ  
うな？という小説たちです。意味が分かりませんね（笑）

更新は不定期、話は面白味に欠ける。そんな、小説たちですが、ど  
うぞ、よろしくやって下さい。

では、今回はこの辺りで、ありがとうございました。

## 我が家（2）

吾が輩は、考える猫である。答へはまだ無い。

「お帰りなさい、あなた。夕御飯はどうします？」

「つむ、食べてきた。風呂……入る」

さて、この無愛想な男は、吾が輩の主人の父親。名前は、小山内  
勝也。

中小企業を束ねる社長である。社長といつても、やはり中小企業の  
社長なのでたいして儲かつていらないらしい。しかし、そのくせ、毎  
日毎日、疲れた顔をさせ、夜遅くまで会社で働いている。  
吾が輩は知っている。こういうのを、ワーカーホリックというので  
ある。

確か、企業戦士なのである。たぶん、であるが、日曜毎朝8時にお

る光化学スマッシュ戦士・一サンカタンソーとヒーロー達の仲間である。

毎朝毎朝、世界の平和を守っているのだから、疲れるはずである。普段は無口で無愛想な男であるが…。

小山内勝也、中々に侮れない奴である。

「チビ猫…」

むつ、なんである?

小山内勝也、何か吾が輩に用があるのであるか?

「じゅらー、だ。会社帰りのペッシュ…ショップで、買つてきた…  
…や」

「お、かたじけない。

ふむ、小山内勝也。中々に侮れない奴である。いや、良い奴である。

「だから、風呂……一緒にに入るぞ」

「…ガニヤー？」

吾が輩は猫である。

もちろん、水が大の苦手である。大嫌いである。飲む分には、かまわない。それなら、美味しい山の水、という母様が買つてくるペッヂョボトルという容器に入つた水を飲むのが大好きである。ペッヂョボトルは少々苦手だったが、飲むのは好きである。

だが、だが、それとこれとは別である。風呂は嫌にや…いやいや、嫌だ！湯船である。深い深い、底の無い地獄沼である。

そこで、吾が輩の心に幼き頃のトラウマ。

あれは、あれはそう、確か。幼き主人が捨てられ汚れた吾が輩を拾つてくれた、あの日。

『猫さん、キレー、キレーしないと家で飼つて貰えないってー』

まあ、可愛いらしい幼き頃の主人である。吾が輩を救う小さな主人である。捨てられ、路頭を段ボールで過ごす、吾が輩を受け入れてくれた主人である。

『はい、お風呂溜まつたから、ドッボーン！？丸洗い、丸洗い……おお、猫さん、沈む？』

だが、あれは無い。あれは無いである。まだ、幼き吾が輩を。まだ、泳ぎやえ知らない吾が輩を。たつぱりと湯を張った浴槽に、ダイレクトに、何も知らない吾が輩を、投げ込むのは無いであります、ご主人さま！？

「……むつ、今日は静かだな？いつもは、風呂場に入れよつとするだけで暴れるのに……？」

はつー？

しまつたである？過去のトラウマに気を取られる内に、風呂場まで連れて来られたのである？逃げなければ……。

「おっ、やつと抵抗……？」

逃げなければ、逃げなければ、逃げなければであるーー！

「湯船は怖がるか」……シャワーな

シャワー？  
シャワーであるか……。

シャワーなんぞ、もっての他なのである!!あの真上から落ちてくる滝のような水は、この世の地獄の一つなのである。あんなのを、やるくらいなら。吾が輩は、吾が輩は、吾が輩わあーーっ!?

ゴンツ！？

「……コイツ、自分で気絶した」

ふふん、なのである。

昨日は、あの後、吾が輩は氣を失つて何も覚えてないのである。ふん、本当に昨日は大変な目にあつたのである。だが、吾が輩は自分で自分の頭を打つて氣絶をするという荒業を成したのである。恐怖は無いのである。氣絶してるのでから、シャワーに対する恐怖は無いのである。ふふん、シャワー克服なのである……。

「…………、昨日は悪かったなあ。今日はお詫びに来て……わくわくやんしゃシーラーズの鰯味出番…………」

むつ、かたじけない。小山内勝也、良い奴なのである。わくわくにやんにやんシリーズのネコ缶は高いのである。だから、美味しいのである。その中でも鯖味は吾が輩の好物なのである。

「だから、今日も……風呂……」

……小山内勝也。お前はまた、吾が輩に頭を打てと？

吾が輩は、考える猫である。答えはまだ無い。

今日はどうやら、大好きなネコ缶と再び頭を打つかの問題であるらしい。

## 我が家（2）（後書き）

「こんにちは。

短編集第2駄です。またまた、考える猫の話です。どうですか？こんな、毎回変な事を考えている猫は？

種類は黒猫ですかね。ぶちやい顔とか言われていますね。でもまあ、普通に可愛い顔をしてる奴だと思います。主人の後ろを付いて回るストーカー癖があります。そして、風呂嫌いで、自分から頭を打つて氣絶する奴です。……どうですかね、こんな黒猫？（笑）

それでは、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

再活用『鬼の嫁さん、キーリ町の方へー?』（前書き）

はい、短編集の2作目で『』がおこります。最初の1作目の猫の話では『』  
ございません（笑）

では、本編へどうぞーー！

## 再活用『鬼の嫁さん、キハラの面の方へー!?』

学校帰りに雨が降ることは、実に厄介である。

傘など持つてきているはずもなく。走り走りたどり着くのは、屋根のある建物。しかし、店はシャッターが閉まり、入ることが許されるのは少しだけ突出した屋根である。それにしても、せっさと帰宅したい俺にとって、このタイムロスは夕方を長く感じさせられる。

日の明かりが雨雲で遮断された下界は闇。夜では無いが暗く、寒い。特に雨に濡れた体は冷えに冷え、風邪をひく。実に厄介である。

俺は濡れた服を持っていたタオルで拭きながら、横目で街中を見る。傘をさして歩く恋人たち。悔しいがそれらを持たない俺にとってそれは敗北感を知らしめる残酷なものだ。

「……雨……」

ふと、俺は隣にいる少女を見る。

雪の様に真っ白な肌。頬はうすく桃色に赤みがさし、少し切れ長な瞳は紫色。そして、その瞳と同じく紫色の髪の毛。外国人の人だろうか？身長は俺が170センチ程度で、その俺の胸下辺りぐらい。華奢な体は未発達で、雨に濡れた服が少女の肌にぴったりと引っ付き、小さく突出した2つ山は、やはり、子どもと言わざる……

そこまで考えて俺は頭をブンブンと振る。一体、何を考えているんだ俺は！？相手は名も知らぬ幼氣な少女。これでは世にも恐ろしい変態ではないか！？

「……むふい」

ヤバい、何か少女がこっちを見てる。少なからず妙な視線で見ていた俺に不信感を抱いたのかも…。

「……タオル」

「えつ？あつ、タオル？あつ、ああー、使つ？俺が使つたやつだけど、まだ十分に使えるし……はい」

少女は無口に俺が渡したタオルを受けとる。真っ白な肌に真っ白なタオルが触れる。ふにふにっと頬が魅惑的に動く。この可愛さは何ぞやー？小動物の好きな俺にとって、この少女の仕草一つ一つが。

「……何を考えとるんだ、俺は……」

「……考え？」

「えっ？あっ、いや、その、あっ！俺今日は早く帰らないと行けなかつたんだ、あはははは、そいじゃあ、またね～え！？」

少女の純粋な瞳に俺は己の邪な思いが見透かされたように感じ、その場から逃げるように走り去る。未だ止むことなく降り続ける雨、俺は後ろを振り向くことなく走り続けるのだった。

降る雨の、出でこま、急に五円雨。（べんべんー）

再活用『鬼の嫁さん、キリ面の方へ…』（後書き）

「んにちは。

オオトリ短編集の2作目、『鬼の嫁さん、キリ面の方へ』で「やせこ

ます。

この話はまだ続きます。短編と言しながら、数話構成になつていて  
訳で「やせこ」ます。まあ、大体の話がこのように数話構成になつてい  
る為、同じようなタイトルがあつたら続きだと思つて貰つて結構で  
す。

ぶつけやけ、最終回の無い小説たちみたいな感じなので、いつの間に  
か続きがあつたり、いきなり打ち切りだつたり…（笑）

では、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

一番田の鬼嫁さん、幼い美少女。

……あ、最後の詩的な奴はせりつと流してやつて下さい。別に意味  
は無いので…（笑）

## 再活用(2)

何かがおかしい。

急に降られた雨に濡れ、帰宅を急ぐ俺。そこで、俺はあることに気が付く。

「なぜ、何故に俺がやつて来た向こうの空は雨が上がっているのに……俺が今しがた走り続ける道は雨がこんなにも降り続いているんだ！？」といふか、この雨……俺を追い掛けて来てはいいか？

俺が足を止めると雨雲は、その場に留まり。走り出すと風も無いのに雨雲も俺を追い掛け走り出す。常に雨雲の中心が俺の真上に来ているのだ。

雷光が一瞬に走り、雷鳴の怒号が叫びをあげる。雷鳴へはまだ少しかかる。どこかで休みを取るべきか？いや、一気に走り帰るべきか。

「鬼が怒っている」

「はつー?」

雨雲を見上げ、途方にくれていると1人の女性が俺に話をかけてきた。

「鬼は怒っている。貴様が鬼の角に触れたから…。この雨雲と雷は貴様への宣戦布告」

「あつ、あー……はい?」

何やらお待的なしゃべり方の特徴的な女性。赤色の髪の毛は燃えるようすで、また、瞳も同じく燃える赤。身長は俺と同じくらいで、その大きなバストは目のやつ場に困るくらいだ。特に雨に濡れた姿はあまりにも凶悪。

「鬼の居ぬ間に、とは良くいったものだ。貴様はこの世界を滅ぼすつもりだというのか?」

「あの、話が見えないんですけれども…？」

「早々元の家へと帰るが良い。そこで、聞き、知り、後悔するが良い」

そう言い赤色の髪の女性は、その場を立ち去る。一体、何だというのだろうか？鬼とは一体？何が怒っているって？

雨続き、晴れを惜しんで、梅雪。（べんべんー）

## 再活用（2）（後書き）

こんには。

再活用『鬼の嫁さん、キミ居る方へ』の続きで『ざいます。再活用  
といつタイトルには、別に意味はありません（笑）

ただ、仮名の時に付けていた名前をそのまま活用しました。『鬼の  
嫁さん、キミ居る方へ』のサブタイトルが、どちらかといつも本タ  
イトルです。

それでは、今回ほこの辺りで失礼致します。ありがとうございます。

2人目の鬼嫁さん、侍美女。次は本命登場？

## 再活用（3）

雨はより激しさを増す。なんと言つか、俺が自転車でひびく連れて、雨粒が大きくなつてこるような…？

「た、ただいま…」

激しく苦しい道のりだった。雨だけならまだしも、強風が吹き荒れ、雷が俺の約数メートル前を落ちて行きやがつた。普通なら地面に電気が走り、感電している所なのだが、運が良かつたのか、それは地面に数十センチの穴を開けただけで事を終えた。

「おかしい、実におかしい。今日は朝のテレビではラッキーーテーのはずなのだが…？」この度重なる不幸、これ如何に！？

「そおいつあ～、災難だったなあ～、媚ビの…」

婿？なんだ、この剛力マッチョなおじさんか？あれ、いいのは俺の家だよな？あれ？

「あの……どなた？お姫さん？あつ、つうの親は仕事に行つていて今留守にして……」

「勝馬……」

「つおひ、父おひー？いやつ、母おひまでーへ何故に、こまは海外で仕事をしてこむせすじゅじゅ……」

「連こなあ、親父殿と母上様こなは急ながら俺が呼び立てたんだよ」

「そう言つのせ、先ほど刚力マッチョなおじさん。」ついで、先ほどからビキビキと眉間にシワを寄せては、俺を睨み付けてくる。……怖えよ、あんた。

「姫川勝馬殿。」この度は、数々のござ無礼お許しくだされ

「まつ？」

「ご無礼？ 数々？ 剣力マッチョなおじさんは深々と頭を下げる。いや、下げるものの視線は、やはり、俺を睨み付けてくる。……あつ、ちなみに姫川勝馬とは俺の名前である。高校一年、帰宅部。何処を取つても平凡な野郎である。

「あの」「ご無礼つて？」

「いや何。雨雲に雷鳴、強風に雷の柱。いや、あまつにも失礼な…。本当に数々、ご無礼をつてか、何故、俺が憎き貴様に謝らなければならんのだ！？ そもそも、貴様が俺の可愛い可愛い娘に手を出したのが、始まりで！ ぐがあああつ！ やはり、殺す。今、ここで、貴様を、ゴハアッ！？」

「お父さん、いわむ…」

「つか、//わよ。お父さんお父さん、お父さんああああつ！」

一体、全体、何なんだ？いきなり、現れた剛力マッヂョなおじさん  
に、それを殴り飛ばす、緑髪の美少女。えつ、これって、何のゲー  
ム？

雨上がり、風ほのか香る、夏の兆し。（べんべん！）

## 再活用（3）（後書き）

こんにちは。

いきなりですが、短編集です。連載物ではありません。確認です（笑）

再活用、3話目。

ヒロイン登場です。この後、一体どうなつていくのか？  
まあ、短編物なんですから、適当な所で終わるのが落ちなんですが  
どね（笑）

では、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

3人目の鬼嫁さん、ボク的美少女。一人称が『ボク』な女の子の意味です。そしてこちらが、一応の正ヒロイン。

## 再活用（4）

日が暮れて、月が見え始めた。涼しく感じるのは雨のおかげ。香る風は大地が喜んでいるように思えた。

「べランダ、冷えるよ~。」

「えっ~あ~、う~」

そう言ひ、俺に上着をかけてくれるのは緑色の髪をした美少女。すらりとした体は体育会系でスタイル抜群、更には彼女のその豊満な胸が俺の目の中の場を困らせる。淡く赤みがさす頬は柔かそうで、優しそうな瞳は髪の色と同じく緑にきらめき、穏やかに俺を見詰めている。

「それで、娘と結婚するのか？」

「そんな事、急に言われても…」

「鬼は気が短えんだーするのかしねえのか?てか、死ね! いますぐ、地獄に落ちろ!」

「不気味な事、言わんで下さい!」

さて、どこから説明しよつ。

俺の名前は、姫川勝馬。<sup>ひめかわ しょうま</sup>「じくじく平凡な高校生である。そんなじくごく平凡な俺に起きた非凡な平凡。なんと我が家に鬼がやって来たのだ。

鬼とはつまり、雨雲に乗り、雷を落とし、おへそを取ると言われる、あの赤青黄色の信号機ならぬ神号鬼である。昔話で桃太郎や土御門などに退治され、人々に忌み嫌われる架空の存在。のはず、なのだが?

「馬鹿か? 神や閻魔がいるのに鬼がいない訳ないだろう? というか、桃太郎は俺たち鬼の仲間だぞ? 桃太郎の嫁は鬼の姫なのだからなあ

…

「まじすか」

「まじだ」

「もへ、話が違うでしょ、ひーお父さん、もう邪魔！用事が済んだんなら、早く帰りなよー！」

「ひー、ひー、そんなー、お父さんせ、お父さんせ、お父さんああああーーー！」

いきなり、やつて来た、この娘に泣かされている鬼の大将は俺にこう言つた。

『責任をとつて娘と結婚しやがれー。』

全く身に覚えのない責任。一体、俺が何をしたとこりのだろうか？しかし、それを聞こうにも、鬼の大将は当然分かっているのだろうなあ、といった感じで、一いちらを睨み付けている。

（怖くて、聞けない……ぐすり）

「ちくしょう、いいか、婿どのー？ミウはこれから貴様の家で寝食を共にする事になる。……責任を果たせ、そもそもくば……いいなつ！？」

（だから、その責任が何なのかが分からないつていつてんだよおおおつー！）

声にならない声で、叫びをあげる俺。誰か退魔師を呼んで…。

「て、えつ？俺の家で寝食を共にして…」

「うへ、といつ事でヨロシクね！」

縁髪の美少女は、そう言いビシッと敬礼をする。…何が何で何なんだ？俺には全くもって状況が理解出来ない。ただ、ぼーと帰つていく鬼の大将の背中を眺めているだけしか出来ないでいた。

何の説明も無しに押し付けられた責任。そして、鬼と言い張る男と美少女。全くもって理解が出来ない。これは、何かのドッキリか…？

「ゴメンね。いきなりで良く分かんないよね？」

そんな間抜けた顔の俺に縁髪の美少女は笑いかける。

「もう一度、自己紹介するね？…ごほん、ボクの名前はリアモンド・イリアス＝ミウナー＝ディア＝リベリオン。長いから皆、ボクの事をミウーって呼ぶんだ。ミウナー＝ディアって所がボクの名前だから…」

少女はそう言い、紅茶をする。そんな、紅茶の花の香りとあまり香りとがマッチして、俺の鼻をくすぐる。

「はあ…。あの、俺どっかで君に会つた事あるかな?」

この少女に見覚えなんて物は無かつた。無かつたが、しかし、鬼の大将いわく、俺に責任があるのでから、彼女との面識があつたに違いない。それが分かれれば、少なくともその責任とやらの意味が理解出来るかもしけない。

「……どうかな?さて、本題は、鬼の娘であるボクと人間の息子である君が結婚するという事!」

と、いきなり、少女は俺の疑問を吹つ飛ばす。肝心な所はここでは無いと彼女は言つのだ。仕方がない、ここは、思い切つて聞こう。

「あつ、それなんだけど。あの、何てか、聞くのは失礼に値するかもしれないとは思つんだけど…俺の責任つて、何かな?」

「君の責任?…ああ、それは別に気にしないで。あれはボクのお父さんが勝手に言つて居ることだから…」

「勝手つて…。でも、君と俺が結婚しなきゃならないのは、その責任つてものせいなんだろ?」

「どうだろ? そもそも、君とボクどが結婚しなければならぬのは、鬼神様のお告げだから…」

「鬼神様?」

「かつて、人は1つの種族だった。天界に住まう神や天使も、魔界に住む魔王や悪魔たちも。そして、君たち現世の人間たちもだ」

緑髪の少女、ミウはゆっくりと語り始めた。

「まず言つておくのはボクが鬼だつて事。そして、鬼は全ての者の始まり。人が進化した過程で未だに、その確たる証拠が掴めないのは、もとより人間とは鬼の姿から退化した者だからなんだ。猿から進化したなんて言われているけど、その真ん中の進化系が無いのはそういう理由…」

「ちょっと、ちょっと待てよ。鬼なんていきなり、言われても信じられないし。てか、もし、それが本当だとしたら……。じゃあ、何か？俺たち人間は、あんたら鬼の劣化版でことか？」

「うん。そういう事になるね……」

「ふざけるな！何が始まりの種族だ！？いきなり、やつて来て何を抜かしてやがる！？そうか、分かつたぞ？お前ら、たちの悪い宗教団体だな？鬼がなんたらこうたらとか言つて、俺たちから金を騙し……」

いきなり、突拍子もない話をされ、混乱した俺は口から出でてくる言葉を考えもせずに次々にポンポンと出していく。すると、そんな俺を見たミウは、少し困ったような顔を見せ、緑色の綺麗な髪を上とあげる。そして、そこにあつた物。それは……

「つ、角？」

「そり、角だね。鬼に角があるのは知っているよね？これは、ボク

たち鬼にとつて心臓と同じくらい大切な物。だから、本当は自分以外の何者にも見せてはいけないんだけれど……信じて、くれた?」

なんてこつた。角だよ、角つの……俺は、その場に座り込んでしまう。つまり、彼女が鬼であるといつ事は、彼女が言つ事は事実?俺は、あまりにも唐突な真実に、しばらく何を考えて良いか分からないでいた。もはや、反論する言葉が見つからない。

「…………それで?」

「えつ?」

「鬼神様のお告げって?」

まだ、信じられない。信じられないのだが、ふと、ミウが言つ鬼神様のお告げとやらが気になつた。だから、俺は反論する力を蓄える時間稼ぎにそのお告げとやらについて聞く事にした。

「ああ、うん。『いざれ真実は闇から光へと曝される。その時、全

ては鬼と人の子に委ねられるだろう。全てが終わり、始まる前に鬼と人の子をこの世に誕生させよ…』これが、鬼神様のお告げ…』

「……ゴメン、意味が分かんないんだけど?」

「つまり、鬼と人の間に子どもを作れってこと…」

「……それは、つまり…」

「……うん、ボクと君とで子作りするって事…」

鬼、物語りで知つていても現実に存在するなんて思つてもみなかつた、唐突な真実。そして、更に聞かされるは、突拍子もない現実。これは一体どういう事か?ただ、1つ…。ただ、1つ分かつている事といえば、ごくごく平凡で何の取り柄もないそんな俺に非凡な鬼の嫁さんが出来てしまつたという、やはり唐突な出来事だった。

## 再活用（4）（後書き）

こんにちは。

短編なのに、いよいよストーリー染みてきました。連載にしても良かったのですが、これい以上連載物を増やす訳にもいかないので…。とりあえず、短編集つてことで（笑）

では、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

鬼嫁さん物語り。

もう少し、続きます。

## 再活用（5）

鬼のパンツは、虎模様。誰が言つたか、誰が決めたか。現実的に鬼の美少女のパンツは、可愛い虎の絵が書かれたピンクのヒラヒラだつた。

「うわわわっ！？」「こここれは、ボクのお母さんが買つてきたやつで、本当はボクの趣味じゃなくて、でもでも、買つてきたんだから使わないともつたいたいから」「うわっ！？」「パツ、パパパンツ返して！？」

「ん…いや、ん…パンツが…」

「うわわわっ！？」「こここれは、ボクのお母さんが買つてきたやつで、本当はボクの趣味じゃなくて、でもでも、買つてきたんだから使わないともつたいたいから」「うわっ！？」「パツ、パパパンツ返して！？」

これは、何の間違いだ？平凡で平凡で仕方がなかつた俺に突如出来た鬼の嫁さん。一人称が女の子らしからぬ『ボク』だが、姿形は、かなりの美少女。見るのも、実にもつたいたいくらいに可愛い生物

だ。

「うう、パンツの事は忘れてよ。あんなの覚えてられてたら、ボク死んじゃう

そんな、大げさな。しかし、そう言つ鬼のボク少女は顔を真っ赤にしてうつ向いている。

鬼。俺は、その存在を今日まで架空の物だと信じて生きてきた。しかし、それは突如、俺のお嫁さんとして現れた。

半ば信じられず、彼女の存在を否定した所。彼女はその綺麗な髪を上にあげ、角を見せてきた。オーテコにちょこんと生える角はリアルで、それを否定するにはあまりにも生々しかった。結局、彼女の話を受け入れてしまった俺は、彼女の父親の言う通り、彼女と寝食を共にする事となつたのだった。

「んつ、しかし…俺の親父たちは？あれ、さつきまでそこいらに居たはずなのに？」

「あつ、お義父さんとお義母さんはね、出掛けちゃつたよ？な

んか、当分帰つて来ないつて言つてた…

ああ、仕事に行つたのか。海外での仕事が忙しい中、いきなり、鬼の大将に呼び出されからな。そりや、早く帰りたいわな…。つて、馬鹿かよ、息子の一大事に何を呑気に仕事なんかしてんだ！？一つ屋根の下で年頃の息子と年頃の他の家の娘が暮らしていくんだぞ！？お前ら心配じや…

「なんかハワイでバカنسしてくるつて言つてたよ？」

「仕事ですらねええつ！？バカنس！？ハワイ！？いや、Why！？なんじやそら？なんだそら？何が何で何なんだああつ！？」

「あの馬鹿親、何故にバカنس？仕事はどうした？いつもいつも、海外で忙しい忙しいって言つてだるひに！？だつ、大体、生活はどうすんだ？誰が金を稼ぐんだよ！？」

「たぶん、ボクのお父さんのせい…」

えつ、鬼の大将がどうじたつて？

「うんと、怒らないで聞いてくれる？」

「ああ、怒りませんとも。全然、大丈夫！ 正常だよ、怖いくらいに俺の心は静かだよ？」

「あうう、あのね。ボクのお父さんが君とボクと一緒に住むに当たつて反対してたお義父さんとお義母さんに値段で120億相当の金塊を渡したの…。だから、働かなくても食べていけるから…バカンスに…」

「…行つてしまつたと？」

「…うん」

「これは、どうしたら良い？」田の前にいる美少女が悪いのか？ い

や、鬼の大将が悪いのか？いやいや、これはきっと、あの馬鹿夫婦が悪いんだ。あいつら、事もあろうに120億で息子を売りやがった！？

「あの、えっと、120億はその、ただの結納金の一部で別に、他意は無くて、だから、お義父さんお義母さんは別に君を120億で売ったとかじや…」

「ええい、もう知らん！親が親なら子も子だつ！！俺も学校へは、もう行かん！毎日毎日、ぐうたらして過（）してやる。へつ、あの馬鹿親ども帰ってきた時には息子はいい歳（）いて無職のブーだ。はははーーー！」

あまりの出来事に心底ムカついた俺は、ソファーにドカッと乱暴に座り、テレビのスイッチを付ける。テレビでは、夜のニュースがやつておりキャスターが延々と喋りまくっていた。

『今日、午後4時44分頃、大手株式会社ジャパンニカルファンドが買収されました。ジャパンニカルファンドは、その海外での影響力は強く、世界でもその名を知られる日本有数の企業で…』

「へえ、スゲエ金持ちが居たもんだ。ジャパンニカルファンドって言えば、日本を代表する名企業の一つだろ?しかも、利益もうなぎ登りで他社をも寄せ付けぬ勢いだったのに…。それを、買収するつてどんな金持ちが…」

『ええ、たつた今入った情報によるとジャパンニカルファンドを買収した企業の名前は、神鬼島株式会社、神鬼島株式会社という事です』

「…………」

「…………」

「これって…」

「うん、ボクの…お父さんだね…」

『ええ、更にたつた今入った情報によると。ジャパンニカルファン

ドを買収した企業、神鬼島株式会社の代表取締役の名前は、姫川勝馬氏、姫川勝馬氏との事です』

「……

「……

「あの、これって……

「……うん、君の事だね……

……鬼の大将、あんたやり過ぎ。

## 再活用(6)

今日の夜は長い。いつもなら、飯を食つて風呂に入つて、テレビでも見たあと、お休みなさいなんだが…。

「…………夜だね」

「うう…………確かに

「えっと、その……ボク、二二二二の初めてなんで、その……優しくお願いします……」

これは、どう対処したら良い? 時は夜の11時過ぎ。もうすぐ、1  
2時を回るといった所だ。

そんな中、俺と鬼のお嫁さん・ミウは2人向き合い、硬直状態に陥っていた。理由は、お察しの通り、『夜の営み』。若い男女が家に2人。しかも、急な事とはいえ、夫婦となつた間柄。…いや、まだ婚姻の届けは出していないが。

『責任を果たせ…』

嫁さんの親父様・鬼の大将のお言葉が脳裏に甦る。全く、身に覚えのない責任なのだが、これは、親公認であり、しなければならない義務との事。俺が風呂から上がつたおり、先に入り終えていたミウがソファーに正座で座り、待つていた。

最初は俺も拒否の言葉を放つていたのだが、次第にうつ向いていくミウを見て、内に何だか居たまれなくなつてきて、遂には『うう、しようがない…のか、これは…?』と、口からポロリと言葉が出てるものだから…。

「あの、あのあの、パンツはさつきの虎の絵のヤツとかじゃないから…あの、あの、ちやんとした、あの…エッチな…その、ヤツで…」

と、この感じ。全く、変な事になつてしまつた。

いや、こんな可愛い美少女に迫られて嬉しくない訳は無い。無いのだが、これは、俺のアイデンティティーの問題である。大体、昨日今日、出会った男女がそんな軽々しくそういった行為に走るのはどうなのだろうか？

いや、一目見た時から…なんて言われたら、どうも言い返せないけど、しかし、俺たちの場合はその一目見た時からでも、昔から好き合っていた訳でも無い。しかも、勝手に決められた夫婦の関係で、まだ、お互いをあまり知らない。いや、知らな過ぎる。

やはり、いつこう事はどうくり時間をかけて、愛を育み…。いや、そもそも、愛があるのか？俺は男で、年頃だ。こんな美少女がやって来て、夫婦となるなんて、ラッキーとしか言いようがない。いや、多少の不都合はあるが…。しかし、少なくとも嬉しいとは感じる。

だが、しかし、彼女はどうなんだ？いきなり、神か何かのお告げだから、見知らぬ男の、しかも、俺みたいな冴えない男の嫁さんにされて。しかも、そんな冴えない男と『夜の営み』？冗談では無い。もし、俺がそちら側ならば、神とやらを蹴り飛ばし、相手である俺を殴り飛ばす。

何故、彼女は平氣そうにしてられる？嫌じやないのか？悲しくないのか？理不尽だとは思わないのか？何故、彼女は笑っていられる？

「どうしたの？」

「君は、本当にこれでいいと想っているの？」

「えっ？」

あまりにも理不尽な仕打ち。自分の出来事で無いといつて、俺は己の頭頂に血が登り上がるのを感じる。ぶちギレそうだ。彼女の純真無垢な顔を見る度に拳で壁を叩きつけそうな衝動に駆られる。

「俺の責任が何なのか良く分からぬ。思い出そうにも、思い出せない。だから、とりあえず、その責任とやらを君たちのいう方法で取ろうと思つ。だが！…君は？君は俺の責任とは関係ないだろう？なのに何故、そんなに笑つていられる？嫌じやないのか？俺みたいな奴のお嫁さんとされて…」

俺はミウの両肩に手を置き、真剣な眼差しで彼女を見つめる。

「えつと……あの……これって、ビリコラプレイ?」

「プレイじゃねええつ……違つだろ、違つでしょ……俺の責任のせいだろ?」鬼神様のお告げだろ?君はこれで本当にいいの?「きなり、見知らぬ男のお嫁さん」それで、しかも、そんな見知らぬ男とセツ…むにゅむにゅ…。と、とにかく、理不尽だとは思わないの?嫌だろ?悲しいだろ?いや、絶対、ムカつくだろ?」

言ひ終わって俺はハツとする。…泣いて、いる?良くならないのだが、ミウは再び顔を下に向けたまま涙を流していた。

「やつぱり…嫌だつたんだな?だよな…やつぱ、こきなり、見知らぬ男の嫁さんだなんて…」

「…やがつ…」

「えつ?」

「ボクは…ボクは…」

「姫川勝馬…！貴様ああああ、ミウ様に何をしたーつ…？」

「うおーつ…えつ、あんた、学校帰りに会った赤髪の美女…!?」

「……ミウ…泣いてる…タオル…」

「うわおつ…更に、雨宿りの幼氣美少女…!?」

一体これは？突如、出現した学校帰りに出会った赤髪の美女と紫髪の幼氣美少女。そんな彼女たちは土足でいきなり、我が家のリビングルームに上がり込んで来ていた。俺はさっぱり状況が掴めず、1人おろおろとする。すると、一頬り涙を流したミウが口を開いた。

「ぐすん、大丈夫。りつちゃん、大丈夫だよ。ボク、泣いてなんかないから…」

嘘をつきなさい、嘘を…。立派に綺麗な涙を流しているじゃないですか。てか、赤髪のお姉さん、俺に刀を向かないで…。

いきなり、現れたりつちゃんと呼ばれる赤髪のお姉さんは身の丈2メートルはあるう刃の刃先を俺に向ける。ギロリと睨む瞳はひとつわ赤く、燃え上がる炎のようだ。

「…タオル…」

「ぐすり、ありがと、ふうちゃん…」

「全く、ミツ様を泣かすとは…。大罪を犯しておいてなお、更なる罪を重ねるつもりか?」

「…………いや、いまいち状況が読めないんですが…」

俺が首を傾げ、クエスチョンマークを出すと、りつちゃんと呼ばれる赤髪のお姉さんはいぶかしげな表情をし、刀を鞘に収めた。彼女のそのいぶかしげな表情が気になつたものの、とりあえず、刀を下ろして貰つた事に俺は安堵のため息を漏らす。

「ぐすん、紹介するね。この2人はボクの身の回りのお世話をしてくれのお友達なの…」

お友達つて…。いや、友達が身の回りのお世話をするか？

「（「ほん、ミウ様。お友達ではなく、執事です」

「……メイド…とも言ひ…」

「ええ～、お友達だよ～」

「あの…」

「あつ、2人とも紹介するね。こちらがボクの旦那様になる勝馬ぐんだよ…」

「……ふん、私の名前は、クイン・イリアス＝リリア＝リベリオンだ。ミウ様直属の執事である…」

「……シユバル・イリアス＝フィレナ＝リベリオン……ミウのメイ

「…」

一方はビデオと、一方はチョコンと何とも対象的な2人なのだろう。

またまた、突然現れた赤髪の美女と紫髪の幼氣美少女。そして、何が不満なのか突然泣き出す緑髪の美少女嫁さん。一体、これからどうなる事やら…。気付くと時間は既に深夜の1-2時。どうやら俺のラッキー テーは終わりを告げていたようだった。

梅雨降らば、上がり水あと、三人の美女！？（べんべん！）

## 死神貴族（1）（前書き）

第3駄目です。  
とある死神と少女の話。

## 死神貴族（1）

お早う、諸君。

私の名前は、デスマランダーキュドラーだ。諸君にひとつでは、長くややこしく聞き慣れない名前であろうから、デスと呼んで貰つて結構だ。

さて、私の朝は水出しドリップのコーヒーにミルクを入れたカフェオレと最大17層にもなる甘くパリパリのクロワッサンから始まる。

ん、何だつて？

それで朝から大丈夫なのかだつて？はつはつは、私は低血圧で胃弱だ。逆に、これ以上のボリュームのある朝食を取れば、朝から苦しむ事となるだろう。故に私は大丈夫だ。

さて、カフェオレとクロワッサンを食べ終えた私が次にする事は、朝のシャワー。ぬるめのお湯は体が冷めぬよう、熱くなり過ぎぬよう、絶妙の温度に設定してある。そして、シャワーも終わり着替えた私が次にする事。それは、私にとつての仕事

『魂の選定』である。

人間の魂を選び、定め、寿命や不必要だとされた者の命を刈り取る作業。まあ、『魂の剪定』とも言って良いだろう。なに、別に不思議な話ではない。これは世界の真理であり、絶対的なルールなのである。命が溢れぬよう、減らぬよう。また、不必要となるものは全て廃するルール。そして、私はそれを実行する役職にある者なのだ。

そう、私は死神。死を司る神なのだ。人は私の事をこう呼ぶ

『死神貴族』

：

⋮ ⋮ ⋮ ⋮ ⋮ ⋮

## 【当夜 桃子の場合】

最低だ。本当に最低だ。何が最低かというと、私が最低なのだ。私の名前は、当夜桃子<sup>とうや</sup>。桃子<sup>ももこ</sup>。どこにでも居る<sup>い</sup>ぐく普通の高校生である。勉強もそこそこ、スポーツも恋愛もそこそこにしか出来ない普通の女の子。

いや、半分は嘘だ。実は私は不良と呼ばれる部類に分類される女の子である。髪は茶髪で、濃ゆめの化粧。派手な口紅派手なネイルアート。ピアスの穴なんておへその穴に開いているくらいだ。

だけど、そんな私でも一応は学校に通っていた。不況で就職難な今の中。結婚したつて旦那の稼ぎで食べていける保証は何処もない。だから、女である私も一応は高校を出ていた方が良いと母親が無理矢理に私をギリギリ偏差値の低い学校に通わせたのだ。まあ、男女関係なく普通は高校ぐらいは出て行く物でしょう?と私も最初は乗り気だったのだが、何だか、面白く無くなり、結局、私は不登校になってしまった。

母親は、何故、学校に行かないのだ？とか、悪い友達と付き合つているのか？など、毎日毎日、あきることなく私に小言を連発してきた。ついに頭にきた私は、母親を叩いて家を飛び出し、友達の家へ。

毎日毎日、同じ平凡な日常の繰り返しで退屈しきっていた私。母親はやれ早く学校に行けだの、やれ勉強はしたのかだの、全くうるさい物だつた。私はそんな平凡な日常が大嫌いで飛び出したかつた。だから、私はこんな不良の姿になつて遊び回っていたのかも知れない。

そんなある日、家を飛び出した行く宛の無い私は、ちょっと素行の悪い連中と付き合い始める。最初は深夜まで遊び回るといった事から、次は未成年者のタバコ喫煙。お酒だつてカラオケに行つた時に飲んでしまつた。日に日に増えていく非凡な日常は楽しく、遂には私は学校にも行かず、やはり、家にも帰らず、1ヶ月という歳月を遊び歩いてしまつっていた。当然、母親は帰らない私に心配してか警察に行方不明の届けを出して私を探した。

そして、1ヶ月経つた今日。私は警察の人を見つかり、家へと帰つて来たのだが…。

「あんたって子はあ～つーびひして、1ヶ月も連絡も寄越さないで遊び歩いていたの！？どうして、そんな事をする娘じゃなかつたでしょ！？髪も茶髪にするし、お化粧もそんな…。どうして？お母さんが何か悪い」とした？」

涙を流して私にそう聞いて掛けてくる母親。だけど、私はそんな母親の姿を見て苛立ちを覚える。

「うるさいなあ。関係ないじゃん。私の人生なんだか私の好きなようにこしたつていいじゃん。アンタには関係ないでしょ」

「なつ？何を言つているの、桃子？関係ない訳ないじゃない？あなたはお母さんの娘なのよ？お母さんはあなたが幸せになれるよつて…」

「だから、私はいまが幸せなの！いちいだあなたが私の幸せを決めないでよー。ウザいなあ」

よく分からぬ。自分が何を言いたくて、何を考えているのか、

私自身、分からなかつた。当然、今が幸せな訳が無いし、お母さんが関係無いなんて事も思つてなんかいない。だけど、私の心にある何かもやもやとしたものが母親に向けられ、母親の言動、存在に対して一つ一つに否定の言葉を投げ掛ける。

「もう、いいわ。私、出でく。今のように友達ん所で遊び回つた方がラクだし。お母さん、邪魔だし…」

と、私はそのまま玄関の方へ体を向ける。

「待ちなさい、桃子！行かせないわよーちゃんと話で、なんでこんな事をするのか？なにが嫌なの？なにが不満なの？あなた、まだ、何も話でないじやない！お母さん、分からないわよー！」

そう言い、私を体」と止めよつとする母親。私はそれに、また苛立ちを覚え、振りほどこいつと力一杯に母親を投げ付ける。すると、どうだろつ。母親は音もなく、すつ飛んで行き。壁に頭をぶつけて、動かなくなつてしまつた……。

「えつ？お母さん？えつ？冗談でしょ？嘘でしょ？お母さん？」

母親の頭から流れる大量の血。私は頭が真っ白になる。なんだこれは？どういう事だ？なんで、何で、意味がわからない！？

…………『気付くと私は家を飛び出して、夜の街中に居た。

最低だ。本当に最低だ。私は、本当に本当に本当に最低だ！！私は夜暗くなつた公園で1人涙を流す。早く、救急車を呼ばなくてはいけない。早く、母親を助けなくてはいけない。なのに、時間だけが刻々と過ぎていく。電話が出来ない。体が動かない。

わざとには無いにしろ、母親を傷付けたのは私。母親を血塗れにしたのは私。恐怖と、後悔の意識に駆られて、私は何も出来ないでいた。

「おや、お嬢さん？こんな夜中にどうかしましたか？」

すると、公園のブランコで1人佇んでいる私に変な男が話し掛けってきた。

黒いスーツに黒いネクタイ。黒い紳士帽に黒い革靴。そして、顔には不気味なガイコツチックな仮面が被さっていた。

「……なに、おじさん？ 援交？ 私いまそんな気分じゃないから… どうか行つてよ」

当然私は男に対し邪険に扱う。高校の制服を着て、夜中を徘徊する女の子に声をかける男なんて、どつかの変態オヤジか警察関係者。この男はどうみても後者には見えない、なので変態オヤジだろう。

母親を傷付けしてきた私は、いま瀕死際に立っていた。警察覚悟で救急車を呼ぶか、いや、誰かが助けてくれるだらうとこのまま放つておくべきか…。

「フム、今宵の月は赤く輝き仕事日和だ。そんな中、お困りの子猫を放つておくなんて私には出来ない。一体、なにをそんなに悩んでいらっしゃる、お嬢さん？」

「しつこい！ そんなに、女子高生とやりたきや出会い系でも利用すればいいだろ！？ あたしに構うなー！」のエロジジイーーー。」

遂に私は男に対して怒りを露にした。本当に世の中は腐つてゐる。幸せを知らないバカな子どもが一時の快楽に闇に身を任せたり。こんな糞な親父は、まだ年端もいかない少女に自分の性的な欲求をぶつけてきたり……本当に腐つてゐる。

私はイライラと、その仮面の男に軽蔑と拒絶の鋭い視線を向ける。

「当夜桃子。来栖川高校、1年4組。歳は16。趣味は、幼い頃母親に教わった、ぬいぐるみ作り。最近は未成年故に心の不安定があり、人生に意味を感じられず、樂しみを感じられず、母親の言葉を無視して良からぬ遊びにふけていた……」

と、そんな私に仮面の男は何かを読みあげるように語る。それは  
私、私の事で、最近の私の出来事。

「あなた…誰？」

驚いた私は何か言い知れぬ恐怖を感じ、立ち上がる。

ホホホホ、と奇妙な笑い声をあげる仮面の男。彼は両足をびしつと揃え、背筋を伸ばし、そして、うやうやしく私にお辞儀をする。

「初めまして、桃子。私は貴族、死神貴族！！……貴女の魂、選定させて頂きにまいりました」

## 死神貴族（2）

死神なんて信じない。死神なんて居やしない。死神なんて宗教によつて作られた、ただのうわごと。

「ホー ホー ホツ ホツ ホツ！？」では、私は一体何者になるのでしょうか？」

「うるさい！ 黙れ！ 嘘るな！ 私は公園のベンチに座る目の前の男にグーでパンチを入れる。

「ホーツ！？ ちょっと、ちょっと、桃子？ 死神にパンチを入れるのはどうなんでしょう？」

だが、そいつは軽やかにそれを避けると、ブランコの遊具まで行き、ギィー「ゴー ギィー「ゴーと立ち漕ぎをし始めた。

「オーホ、オーホ、オーホッホーホーッ！！私は貴族、死神貴族！私の仕事は魂の選定！！！皆の皆の寿命を頂く。悲しくも重要な役職なのです！！」

死神貴族・デス。

コイツはいきなり私の所に現れ、こう言つてきた。

「貴女の魂、選定させて頂きました。で、残り寿命……あと、一時間！ホホホホ、それでは良い人生を～」

殴つてやつた。ぼこぼこに殴つてやつた。それはもう凄まじい程に。そして、私はコイツに言つてやつた。

「なにが、死神よ？そんなの居るわけ無い！だいたい、寿命があと一時間！？ば、ばか言つてんじやないわよ！？あんた、アレでしょ？変な宗教勧誘！絶対そう！絶対そなんだから！！」

私は信じなかつた。

たとえ、コイツが私に関する全ての事柄を言い当てたとしても私

はコイツを死神なんて信じなかつた。それを見た自称死神・デスは一瞬考えて……

「ふむ、分かりました。信じて貰つには、コレしかございません」

得意気に両手を掲げ、何やらぶつぶつと呟いた。すると、どうだろう、夜の公園は次第に光に満溢れ、そして、そこから何か生き物が出てきたのだ。

「……そ、それって犬？」

「そうです。地獄の番犬・ケルベロス……」

「嘘うそ……だつて、頭3つじゃないじゃない？」

「ホウ、意外と物知りですね桃子？確かにこの子は3つ頭ではござません！だつて、この子は地獄の番犬ケルベロス……の子どものケルルちゃんだもーん」

「殴つてやつた。ぼくがここに殴つてやつた。それはもう物凄い程」

「ホホホホ、痛いです。私の名前は『テス』です。あれ？『テス』です『テス』？ん？『テス』です？『テス』です？まあ、『テス』です。……ん？『テス』です『テス』です？……？」

「もう良いくらいやうねん！…」

「オホーック……いえ、オホーホホホホ！…とりあえず、分かってく  
れました？私、死神！」

ス。

あれで分かると思つてゐるのかしら？のバカ？…だとしたら呆れる程  
にバカだ…。私はため息をつく。

「さて、桃子。信じても信じなくともキミの勝手であるが…」

と、急に真面目な声で『テス』が話し掛けてきた。恐ろしい程に低い  
『テス』の声。先ほどまでホホホホなんてふざけていた男の声では無か

つた。

「な、何よ？」

私はそのままテスの恐ろしさに低い声に驚きながらも平静を装つ。

「……残り15分だ」

「…？」

「そろそろ魂の悲鳴が聞こえてきたはずだ。先ほどから胸が苦しみだしたのに気付いているか…？」

胸の苦しみ？

私はバツと言われた胸に手を置く。

「……

心なしか少し苦しい。ドグンドグンと波打つ私の心臓。だが、それはいつもより強く波打っている。そう。まるで、最後の足掻きのめり……。

「はあ……はあ……はあ……」

だんだんに息が苦しくなる。先ほどまで元気であったはずなのに私の額からは信じられないほどの大汗が流れる。

「ふむ、さて、時間も近いことだし……デスサイズーー！」

苦しみにうずくまる私にデスは見下ろす。そして、どこからともなくそれを取り出す。大きな大きなそれ。それは俗にいう死神の大鎌。どす黒く光る刃は三日月状に闇に美しく映る。

ああ、私、死ぬんだ。全然、生きてないけどもう死ぬんだ。あは、あはは……？お母さんに謝らなきや……。『めんなさいって、『めんなさいって、謝らなきや……。

いつも素直じゃ無くて、『ごめんね。わがままに育つて、『ごめんね。お母さんの言ひ事聞かないで、『ごめんね。いつも困らせてばっかりで、『ごめんね。不登校で、『ごめんね。突き飛ばしたりて、『ごめんね。救急車呼ばないといけないのに、『ごめんね。お母さん、『ごめんね。お母さんの娘で、『ごめんね。産まられてきて、『ごめんね。お母さんの娘に産まられてきて……『ごめんね。

「懺悔は済んだか、桃子？」

死神・デスが大きな鎌を振りかざしてきた。私は死んでしまう。苦しみの中、私は後悔した。もつと、ちゃんとしていれば良かつた。もつと、お母さんに親孝行して置けば良かつた。でも、もう遅い。デスが鎌を振り下ろす。何の躊躇にも無く、何の戸惑いも無く。

『テヘンテヘン、テヘンテヘン』

と、そんな最後の絶望の中、急に可笑しな音楽が流れ始める。そして、それと同時にデスが振り下ろした鎌が凄いスピードで私の顔の皿の前に突き刺さる。

「…？」

ざつくりと大鎌の鋭い刃先が地面に突き刺さる。艶かしい程のその刃はヌラリと妖しく光っていた。その大鎌を目の前にして私の背筋にゾクリと寒気が走る。そして、次の瞬間、デスが私にとつて驚く事を口にする。

「ああ、桃子…お前の魂を刈り取るのは中止だ」

え、どうして今さら?と、私がデスに疑問をぶつける前に更なる驚きの言葉を彼は口にした。

「お前の母親の『最後の願い』で、お前の寿命が伸びた。母親に感謝する事だな…」

え、なに?デスの言っている事が私には理解が出来ない。一体、何を言っているのだ?私のお母さんの、最後の…願い!?

「ホホホホッ、次に私が魂を刈らなければならない人物の名前を教えてやるつか、桃子？」

「デスの言葉に理解が着いていかない私。そんな私にデスの言ひ、更なる驚きの言葉、それは…

「次に魂を刈られる人物、それは、当夜桜子……お前の母親だよ」

## 死神貴族（3）

病院のベッドで桃子の母親は寝かされていた。頭には真っ白な包帯が巻かれ、荒げる事なくただ静かに息をしている。

「ホホ、まあ、選定というか、決議は神界で決まっているので、後は刈り取るだけなのですがね？」

「……」

しかし、そんな母親の姿は、まるで、ロウソクの火が消えてしまうかの様な姿に桃子には見えた。

「無視をされました。オホホ、無視をされてしまいました」

死神。 そう、この骸骨を模した仮面を被った馬鹿げた姿の男の存

在が、桃子にそう思わせた理由だつた。母は死ぬ。今日の内に死ぬ。この死神に魂を刈り取られて…。桃子の頭に、死神への憎しみが沸く。と、それと、同時に自分への後悔が押し寄せてきた。

自分のせいだ。自分が母親を突き飛ばしたから…。自分が母親の言つ事を聞かなかつたから…。彼女の頭には、そんな言葉がぐるぐると回る。次第に涙も出てきて、どうしようも無い感情が溢れだしてきてしまつ。

「めんなさい、と桃子は後悔をした。自分が死ぬはずだつたのに…。本当は自分が死神に魂を刈り取られてしまうはずだつたのに…と。

「あなたのお母様は素晴らしい人だつたようですね？」

死神が後悔する桃子に声を掛ける。死神は、宙に体を浮かべ、まるで滑る様に母親の前まで移動する。そして、その母親の安らかな寝顔を確認しながら言葉を続けた。

「人の業によつて、その人が善人であるので在れば、神界は、その

者が死ぬ最後の時。その者の最後の願いを、叶えて差し上げる「

その言葉に桃子は、痛い程に心を締め付けられる。そう、お母さんは素晴らしい人だつた。私のお母さんは死んではいけない人だつた。借金を苦にして逃げた父親、その借金を僅かながらにも返済しつつ、そして、私を、ここまで育て上げてくれた。頑張り屋さんで明るくて、いつも私の事を思つてくれたお母さん。

すると、スヌーツと桃子の瞳から涙が流れ始める。

では、何故?…どうして、私はお母さんに反抗したの?分からぬ分からぬけど、思えば、つまらない理由だつた気がする。ただなんとなく、ただお母さんを見ているだけで反抗をした。なんて馬鹿馬鹿しい理由だ。桃子は後悔する。言い表せない感情と共に更なる後悔の情念が桃子へと押し寄せつて来る。

「!?」

ぐるぐると回る気持ちに整理が付かない中で死神・デスが大きな鎌を振りかざした。

「ま、待つて……」

桃子が大鎌を振りかざすテスに戸惑いをみせる。まだ、早いじゃないか？まだ、私は納得していない。何故、母親が死ななければならぬのか…。

「しかし、桃子よ。君は母親が邪魔だったのだらう？」

そんな彼女に死神・テスは、そう言葉を投げ掛ける。

「母親が居なくなれば楽になる。もう、うるさい事を言われなくてすむ。自由だ。君の好きな様に生きていける…」

「そ、そんな、だけど……」

確かに、そんな事を思った。自分勝手に生きていた自分に心配の

言葉を掛けてくれた母親にそんな事を言つた。桃子の心にぐさつと死神・デスの言葉が突き刺さる。

「ならば、好都合ではないか！？君は生きながらえて、邪魔な母親は死ぬ。ホホホホッ、君にとつて、これほどの好都合な事は在るまい！」

死神・デスが笑う。骸骨の仮面の向こうで、不敵に、妖しく、どす黒く、笑う。

「……なあ、最高だろ？、桃子！？」

「…違う」

桃子は思った。本当は違う。最高な訳が無い！！本心では、そんな事、これっぽっちも…。

刺さつたトゲを抜くかのように、放つた言葉を搔き消すかのよう

に、桃子は否定の心を思い浮かべる。

「だが、言葉は放たれた！！言靈は確実に、この世に産み出された  
！－これは、お前が望んだ事だ、桃子！？」

そんな桃子の思いに死神・デスは、更なるトゲを、言葉を、桃子に投げ掛ける。

「私が…望んだ？」

違う。望んでなんかいない。私は、そんな事、望んでなんかは、いない。桃子は心の中で、それらを全て否定する。そして、死神の鎌を振りかざす死神に思いをぶつける。

「私は、本当はお母さんが好きなの…」**働く者で、正直者で、優しくて、厳しくて…**「

そう言い彼女は大鎌を振りかざすデスに近寄る。母親を庇うよう

に死神の前にと体を差し出す。母親に振りかざされた大鎌を、びつにかしよつとデスに触れようとする。

「私はお母さんに生きていて欲しい！－反抗したのは、私が怠け者だつただけ…そんな、私が惨めで、ただ、お母さんに八つ当たりをしていただけ…」

鎌を振りかざす死神・デスの目の前にへと立ちはだかる桃子は、自分のこれまでの人生を振り替えつてみる。

幼い園児であつた頃、お母さんが大好きで、お母さんみみたいに成りたかつた。小学生の頃、授業参観ではいつも、お母さんに頑張っている所を見せようと意気込んでいた。

中学の頃、ただ訳も無く無氣力になり、母親にも反抗し始めた自分。

高校に入った頃、ただその日を過ごしていれば、それで良いと考えていた自分。

そして、いま。

歳を取り、多少、知恵が付いた自分は、怠け者で、ただ親に甘えて生きていく事に樂を覚えてしまい。ただただ、そんな、自分は母親とマトモに話が出来なくなっていた。

もう、ここに居る自分は、そんな怠惰と劣等を持った、恥ずべき娘である。

「お願い…待つて…」

だから、桃子は、そんな至らない自分の人生に気付いて、死神に、デスに、母親の命を刈るのを待ってくれるよつ頼んだのだ。

「…何故？」

しかし、そんな桃子の言葉に死神・デスの声が、急に低く鋭い声色にへと変わる。

「何故、私が貴様の言つ事を聞かなくてはならない？」

低くデスの効いたデスの声が病室に響き渡る。

「何故、貴族である私が貴様の様な身勝手な餓鬼の言つ事を聞かなくてはならない？」

病室の闇がデスの周りを包む様に蠢き始める。闇を纏つたデスの体がズン、ズンッ、と大きくなっていくのが分かる。

「つああ！？」

ガシリツと、そんな巨大な体へと変身した死神・デスに頭を桃子は掴まれてしまう。ぐぐぐと骸骨の仮面にへと桃子は顔を引き寄せられる。

「本来ならば貴族である私に、いやつ…神である私に、貴様の様な身勝手で、教養の無い餓鬼が話を掛ける等といった事をえもはばかれるといつのこと…」

「つあ、ああ…？」

「そんな貴様が私に願いだといつ…？…何故つ…？」

「ビビビビビ…ヒースが言葉を放つたびに病室に漂つた空気が揺れる。がつしりと掴まれた腕に力が入り、桃子の頭がギリギリと痛みを放つ。

「…わ…たし、が、死ぬ…から…」

「ああんつ…？」

「私が、死ぬつ…から、だから、お母さんは…」

必至に絞りだした声だった。突発的に出した言葉だった。しかし、桃子にとって、それは真意であった。母親が死んでしまうくらいなら、代わりに私が死ぬ。

「またか…」

「…えつ？」

そんな必至に考え出した桃子の言葉に、デスが再び呆れた様な怒りをみせる。

「また、貴様は同じ過ちを繰り返すのかつ！？」

ブウンッ、と投げ飛ばされた桃子の体が部屋の隅にへと飛ぶ。投げられた勢いと壁に当たった衝撃で桃子は何が起きたか理解できない。同時に死神・デスの怒りにも理解を示せないでいた。

何故…。何故に死神・デスは、自分に更なる怒りを向けているのか…茫然とした、桃子には分からなかつた。

「母親の思いに抗つ。その結果、どうなつた?ん?どうなつた、当夜桃子つ!?

母親に反抗し続けた少女。無氣力に人生を送り、怠惰にその身を任せ、劣等に母親と対立した娘。

その結果、死神が現れ、彼女は早すぎる死を迎える事となつた。その為、彼女は最も大事な人を失う結果となつた。

しかし、彼女はまた。またもや、彼女は同じ過ちを繰り返そつとしていた。

「桃子…桃子…桃子おつー?当夜桃子よ、お前は改心したのである?ならば、母親の言つ事は聞くべきでは無いのか?」

んんつ?と、嫌に鼻に付く口調で死神・デスは桃子に同意を求め

る。

確かに、桃子は、ここに来て、ようやく母の思いに報いるべく怠惰で劣等にまみれた心に改心をした。確かに、桃子はようやく反抗を繰り返し、聞き流していた母親の言葉に従つと心に決めた。

「だけど……だけど……そんなのって……」

が、しかし、それでは、あまりにも酷いでは無いか！？やつと、素直になつたのだ。やつと、怠惰な自分では無く、活気に溢れ、やる氣に満ちた自分に成ると心に決めたのだ。未だ眠る母に、そう誓いを立てたのだ。

なのに、母親は死ぬ。どうやつたつて、死ぬところのかー？

ここで、母の言つ事、つまり、『娘の代わりに自分が死ぬ』といふ、母の最後の願いを聞けば、母は死ぬ。愚かな自分の代わりにと、母は死んでしまう。

そして、逆に、それに逆らえば、これまでと一緒に、母親に抗い、怠惰の時間過ごしてきた自分という事になり、結果、やはり、命を助けた母は、自分の代わりに死んでしまう。

「そんなのつて……あんまりだよ……」

どうしようも無い状況に、桃子は絶望をした。後悔を考えず、自分勝手に、親に抗い怠惰に生きた少女は、後悔を超えた絶望に苛まれた。

「幸せを願い、魂は、在るべき場所へと会せよ……我ら、群生の束ねる界の憑代なり……」

そして、そんな少女の悲しき思いを余所に

「斬つ……」

死神の鎌は、振り落とされた。

：：：：：

「これは、天界。その中で何層にもビルの階の様に束ねた天界の下から三番目に数えた世界である。

そんな空は薄く縁に彩った色をした、三番目の世界で一番大きな屋敷に、漆黒の衣に身を纏つた男が帰ってきた。

「どうやら君は、いまやつと仕事を終えて帰宅して来た所のようだ。

身に纏つた漆黒の黒衣を脱ぎ、中に着た黒スースツ姿で屋敷の5メートルはあらう門を開ける。

「おや、死神界で最も権威のある死神のデスマランダー殿ではないか？いまお帰りで？」

門を開けて、一步と足を踏み入れない所で、仕事を終えて帰宅したての死神・デスに後ろから声が掛かる。

それに、デスは少々、嫌な顔を見せるが、振り返る同時に満面の笑みを浮かべて、声を掛けてきた相手に返事を返す。

「やあ、シェリペン！…偶然だね？キミも仕事の帰りかい？」

そんな訳は無かつた。このシェリペンという死神は、何かに付けてデスと張り合い。あれやこれやと文句を付けてくる人物である。大方、今回の仕事の話で自分が帰つて来るのを待ち伏せしていたに違いない。と、デスは心の中でため息をつく。

「いや、私はキリを待っていたのだよ。今回のキリの仕事の話で…  
ね」

「ほり、見ひ、せひばつ…。と、テスは心の中で、再び、ため息をつべ。

「やあ、すまない。我が輩は、もう、疲れてしまつていて…直ぐにでも真っ白でふかふかのベッドで眠りたいのだよ…」

「そんな訳で、テスは、少々、相手にするのが苦手なショリベンを躲かわして、門の先へと入らうとする。

「それは疲れているだろ? うね? 神界のお偉方にコツコツと絞られたのだからね…」

「しかし、そんなテスの思いを余所にショリベンは、屋敷へ入る彼を離してはくれない。

まつたくもつて、迷惑であった。我が輩は、疲れているのだ。眠たいのだ。いちいちと、キミの戯れ言に付き合つて、暇はないのだつ、とテスは心の中で訴える。

「尊によるべく、神界の決定を無視したらしけ、キミ?」

「ああ、ああ、うん、そりね…」

「まいか、反応の薄いテスに<sup>いぶか</sup>訝しげな表情をするシエリペンだが、そのまま、言葉を続ける。

「キミは神界の決議を否定したのだべつ？それが、どうこういつ事が分かつてこいるのかつ！？」

ぐつとシエリペンの顔がテスに近寄る。しかし、真面目な顔をするシエリペンとは対象的にテスは、ハヘッ？と締まりのない笑顔を見せる。

「良くて貴族の称号剥奪、悪くて死神の役職の剥奪だぞ！？」

それにジエリベンは、荒げた声をあげるが…

「いや、まあ、どちらでも無かつたですよ…？」

と、デスは未だ、締まりのない笑顔を見せる。

「今回はっ、だ！！キミは、死神界でも権威のある死神だからね。  
おいそれと死神の役職を剥奪させられない…」

だが、しかし、ヒエリベンの言葉は続けられる。

「キミは、今回だけでなく他にも前科がある。次に同じ様な事をすれば、どうなるか分かつたものじゃないぞ？」

もしかしたら、最悪の場合。死神から人間への格下げという、処罰が下るかもしないのだぞつ！？と、ツェリペンは、近付けていた顔をデスから離す。全く、死神が人間に格下げなどと堪った物じゃない。ツェリペンは、ぶるぶると体を震わせ、デスに、もうこんな馬鹿な事をしないように告げる。

「それで…？」

「え？」

「なぜ、神界の決議に逆らつたんだ？」

そして、今度は、何故、デスが神界の決議に逆らつたのかと理由を聞いた。

「何故に…ですか？」

それに対しても、テスは、やや、空を見上げながら考へる。

「いや、ほり、あのお母様の最後の願いは『娘の幸せ』とこいつ事だつたのでしょうか？」

と、今回の仕事の相手である当夜桜子と当夜桃子の事を思い出す。

「ああ、だから、神界は当夜桃子の命を刈らず、代わりにキミに寿命である母親の当夜桜子の命を刈るよう命じたのだろう？」

「ううのだ。自分勝手に生きてきた当夜桃子に、神界のお偉方は世界のバランスを取る為の魂として刈り取るように命じた。要らぬ魂ならば、現世に必要は無く。代わりの無垢なる魂を送る……と。

しかし、そんな中、偶然か必然か、当夜桃子の母親・当夜桜子の寿命が来てしまつ。

原因は、娘・桃子による頭部損傷の出血多量……では無くて、実は、そのケガの入院中に持病の心臓発作が起きた、という物だった。彼女は、昔から心臓に疾患があつて心臓が弱かったのだ。しかし、そ

れでも子どもを産んで、一生懸命に育て、生きて来たからこそ神界は、彼女に最後の願いを許したのだ。

そして、そんな彼女の望んだ最後の願いが…

『私は、最後まで愚かな女でした。娘の心も分からず、娘を傷付けたまま死んでしまうなんて…だから、私は望みます。私が死んだ後、娘が幸せに生きていけるように…私とは違う幸せな人生を生きていけるように…』

という、娘への思いであった。つまり、彼女は最後に『娘の幸せ』を願ったのだ。

だから、神界のお偉方は、命を刈り取る筈であった当夜桜子の『幸せ』という願いの元に、彼女の命の刈り取りを中止させたのだ。そして、その為やる筈の仕事を失つたデスに代わりに寿命であった、その母親・当夜桜子の命を刈り取るよつ命じたのだ。

「しかし、キミは母親・当夜桜子の命を刈り取らなかつた。もちろん、娘である当夜桜子の命も刈り取らず…」

「どういう事だ？」と、ショーリベンは、デスに問いただす。すると、デスは、漆黒の黒衣を再び身に纏い、笑みを浮かべる。

「ハハハッ、いや、なに、簡単な事だよ、ショーリベン……」

「そう言い、屋敷の方へと足を運ぶ。縁に彩った空を見上げながら、ふつと、何かを思いながら……。

「だつて、母親が居なければ、彼女は幸せではないのだから……」

デスアランダー＝キュドラー。彼の仕事は、現世に集う魂達の選定。バランスを失った世界は、ジグソーパズルをひっくり返した様に崩壊してしまつ。だから、そつならない様に死神である彼は、数多にある魂達を選定していく。

だが、彼の心は誇り高い。例え、神界の決めた決議にさえ、疑問が沸けば逆らってしまうのだ。例え、それが如何に愚かな魂であつても、まだ、救いがあるのであれば、彼は優しく導いてくれる。世界がより良い世界に、魂がより良い魂となる為に、彼はより良く、魂を導いていく。

そんな彼を人はこう呼ぶ

## 死神貴族（3）（後書き）

長らくお待たせしました。死神貴族の続きです。

色々としつくり来なかつたので、書き直していたのですが、結局、しつくり来ないまで掲載です（笑）。

話の概要は、娘を助ける為に最後の願いで娘の幸せを願つた母親なんですが…。結局、母親が死んでしまつたら、娘は幸せじゃ無いじやん？という事で、死神・デスは、神界のお偉方に逆らつて、どちらの命も刈り取らずに帰つて来てしまつた…というお話。なんですが、本編の内容で分かつて頂けたでしょうか？なんか、不安ですね。分からなかつたという方、ごめんなさい…！

ちなみに、デスが桃子に母親の死因を教えなかつたり、死んだ原因は桃子のせいだと嘘をついたのは、桃子の魂をより良くする為です。何故つて、それが、彼の仕事ですから…（笑）

さて、しつくり来ないついでにタイトルもしつくり来ないので変えてみました。でも、やっぱり、しつくり来ない（笑）

ん、さて次はどんなしつくり来ない話なんだろうか？

何故だ？何故に俺はこんな仕打ちを受けなければならぬ…？

「おー、ちょっと反省したか？この助べーー…？」

「無実だ…俺は…無実だ…」

「一階のベランダからヒモで吊るされ空中をぶらぶらと揺れる俺の体。一  
体全然、何が何でこうなった？」

「全く、如何わしいー…ミウ様に対し大罪を犯しておいて、更に、フ  
ィレナを手込めにしよとはつーまだ、幼き娘だといつに…全く…」

「ああ、そうだ。それが理由だつたな。いや、誤解して貰つては困る  
んだが、俺は決して紫髪の幼氣美少女・フィレナ嬢に手を出してい

ない。

では、何ゆえにこのような事実無根の容疑がかかっているかというと…。話は今日の朝に戻る。

：：：：：

「むつあ～ああっ！……あんまり、眠れなかつたかも…」

昨日、いきなり、押し掛けで來た鬼の嫁さんとその付き人2人。泣いた、泣かせた、泣かない、泣かせてないの押し問答で深夜の2時ぐらいまで起きていた俺たち。次の日が休みだとはい、さっさと寝て置くべきだつたと後悔をする。

「んつ、なんか味噌汁の匂いが…」

「どうか、嫁さんがいるんだったな。……もう、日和つてはいけない  
と思いつつも、やはり、嬉しいものだ。彼女いない歴、歳の数の俺  
にひとつはもう幸運としか言いようがない。」

「が、しかし、これはあくまでも仮の処置。俺の仕出かした責任とやら  
に無関係のミウを巻き込む訳にはいかない。例え、それが神の意  
思でも。好きでも無い男と結婚だなんて、彼女が不憫過ぎる。」

「昨日は何かグダグタになつたけど、今日はハッキリと聞こう。やつ  
ぱり、理不尽に決められた結婚なんかしたくないだろうつて。俺に  
ひとつは非常に残念な事だけど、彼女には関係ないから事だからな  
。」

「んつああ～あつ～！」

「俺はベッドの上で背伸びをし、起き上がる。朝の光が異様に眩しく  
て目が霞んでしまう。」

「……むふい……」

ええ、田が霞んでしまつてゐるんです。これは、夢か幻なんです。あり得ません、俺のベッドに紫髪の幼氣美少女が眠り込んでいるなんて、あり得ませんから…。

「……へちゅん……」

「わあ、可愛いくしゃみだこと…。あはは、寒いよね、掛け布団を剥いじやつてゐるからね。いや、だつて起きないと朝だしね。てか、君、パジャマはびうした！？何ゆえにパンツ一枚で寝とるんだじゃー！？そら、くしゃみの一つもするわボケーつー…？」

「ヤバい、ヤバい、ヤバい！これは、マズイ。一体なんで？なんでこの娘が、俺のベッドで、しかもパンツ一枚で寝てんだ？いや、とにかく、他の2人に見つかる前に何か良い処置を…」

「ヤッホー、勝馬くんおはよーー朝だよー、早く起きなことボクが君のお布団に潜つて一緒に寝ちゃ…ひ…よつて…」

「ああ、こやこやこや、違つ違つ。われは、君が思つてこいつ事とは全然違つかり…。あの、ほり、よくあるじやん？トイレで

起きて、帰りは寝ぼけて、他人のベッドで寝てしまうつてこ……と  
が……あれ? なんで、そんな怖い顔を? あれ? 赤髪美女ことリリアさん、いつの間に? あれあれ? 2人とも、何かな、その刀と金属バットは……あつ、あ、ああ、あぎやあああああああ——つ……? 「

：：：：：

その後は散々な目に合つた。身の丈2メートルを超える刀で鞘に入っていたとはいえ、おもいつきり殴られるし、金属バットは最終的に投げられ、俺の大事な金的部分に当たるし……。

「なぜ、何故だ。俺が何をしたあああつ!」

「……むふい……」

「うあつ! ? 紫髪幼氣美少女! ? いや、改め、不幸を呼ぶ紫髪幼氣

美少女！何をしに来た？また、俺に不幸を…

「…む…ふい…」

あつ、何も言わずに行ってしまった。か、可哀想なことをしたかな？いや、しかし、これは当然だろ？少なくとも、俺に非はない！……と、思ひけど。

やつぱり、可哀想なことをしたかな。まだ、幼いんだ、寂しかったのかもしないし。そう考えれば俺のせいか？俺の責任とやらのせいでミウがこの家に来て、その付き人として彼女も連れて来られたんだ。故意にでは無いにしろ、幼き彼女を親元から離したのは、やはり、俺の責任か…。

「おい、貴様！」

「んあつ？あつ、リリアさん！聞いてください、誤解なんです。あれは、なんてか、違うんです、俺は…」

「ふむ、まだ、反省していないようだな…。せつかく、ミツ様の恩情で毎飯を食べさせてやろうと貴様を下りしに来たのだが…却下だな…」

んな、馬鹿なあ～つ～えつ、マジ?マジなんすか、リリアさん?ちよつと、うわ、本当にに行つちやつたよ、あの人。あ～、朝から何も食べてないからお腹があり得ないほど、ぐう～ぐう～鳴つてるよ。誰か、何でも良いから食べさせて…。

俺はグタリと体をうなだらせてぐるぐると空中を回る。止めようにも、腹が減りすぎて力が入らない。ああ、もつ駄目だ、死んでしまう。……と、そう思った矢先、何やら俺の真下から魚を焼く匂いが！？

「はつ～なんだこの匂いは～?つおつ、紫髪の幼氣美少女ことフイレナ様!～まつ、まさか、あんな酷い事を言つたにも関わらず俺に食べ物を!～?」

「……むふい……」

そこに居た女神！それは、先ほど俺が非情にも不幸を呼ぶなんたら  
かんたらと言つてしまつた紫髪の幼氣美少女・フィレナ嬢であつた。  
彼女は何処からともなく、持つて来た七輪とうちわで魚を焼いてく  
れていたのだ。

「ああ、なんて良い娘なんだ君つて娘はあ～つ！ゴメン、本当にゴ  
メンね、あんな事を言つて、お兄さんが悪かつた、いや～本当に…」

「むふい！むふい！むふい！」

パタパタと一生懸命にうちわを扇ぐフィレナ。印象は大人しく静か  
な彼女だが、今はとても一生懸命。その甲斐あつて魚からモクモク  
と煙が上がる。

「「ほつ、「ほつ…あの、フィレナ様？もうちよい向こうでやつて  
貰えないかな？げほつ、煙が…煙が、目と鼻に入つて…がほつ！？  
口にも入つて喉が…」

パタパタパタ…

「あの……ゴホッゲホッ……あの……」

パタパタパタパタ……

「フイレナ様？……ゲホホッ！？ふい、フイレナ様？」

「…………むふ……い…………」

笑つてゐるヘンの娘、不気味に笑つていらっしゃることですか？おおつー？

「ゴホッ、お前つ、もしかして、やつと俺が『不幸を呼ぶ』とか言つたから、その仕返しに……ゲホンッ？』

「…………うふふふふふふ…………」

「ぎやあああつ！？マジかよ？マジなの？マジなんですね？ちよつ、悪かつた、悪かつたつて、フィレナ？ゲホッゲホホッ！？ちよつ、待て、そんないきなり強く扇ぐなつてガボッ！？」

「むふいむふいむふいむふいむふいむふいいいい…」

「フィレナ様フィレナ様フィレナ様フィレナさまあああ～つ！？悪かつた、ガホッ、いや、すいません、ゲホッ、ごめんなさい、ゲヒツ、申し訳御座いませんでしたあああ～つ！…ゲヒッ、ゲホムツ、ガボンツ、ガバツ？ガバババツ！？」

死ぬ、死んでしまう。ヤバい、息が、息が出来ない！？煙に燻され、スマーケ俺の出来上がり？わ、笑えない…。

「……」

「……むふい？」

「つあー？ふうちゃん？何をしてるの？つちゃんがまだ、縛つていた方が良いって勝馬くんを下ろして来なかつたつて言つたから、ボクが下ろしに来てみたら……」

「ハ、ミウ様、私はこの事に関しては、無関係ですよ……」

「…………喋らなくなつた…………」

「や、それは、そうだろ？…。フィレナ、いまお前がその馬鹿にやつてる」とは煙り攻めと言つて、最も苦しい拷問の一種だぞ？

「て、そんな事を言つての場合じやないよーー早く、勝馬くんを下ろしてあげないとーー！」

そんな訳で、何とか一命を取り留めた俺。しかし、それ以来、俺はフィレナには出来るだけ近付かないようにしている。あの大量の煙り。あれは一生消える事がないトラウマ。そして、あのフィレナの恐ろしい笑顔…

「うう、今日は酷い日になつた。ぐすつ、もうベッドに入つて寝  
る。」

「……むふい？」

「先づおめでつ！」

消える事の無い、トライアです。

## 再活用（7）（後書き）

はい、鬼嫁さんの続きをで『』やります。

2、3個あつた話の中で、続きをなる物を載せてみました。（後は、間に何か話を挟まないと時間軸などが変になつてしまつお話ばかりです（笑）なんか、勢いだけで書いたやつみたいでしす？）

話は、紫髪の幼氣美少女・フィレナ嬢のお話。すごい、ダークですね（笑）天然なのでしょうかね？よく分かりませんね。キャラ的にはマスクコットになるのでしょう。続きを書いていくならば、たぶん、そうなる筈です。

とつあえず、ちょっと続きを書いてみましょつ。とんでもない所で終わりやうですが…

鬼のお嫁さんが来て3日目・始動…

A  
M  
7  
:  
0  
0  
}

「... ?」

「どうしたの？なんか田覓めが良くないね？」

「……なんか、昨日は寝るとこつよつ氣絶したとこつ感じで眠りに着いたから……」

「……はつ？」

昨夜の『フイレナ、布団に忍び込む・再び』で、氣絶する様に眠つてしまつたのが災いして今朝は最悪の日覚めである……

AM 8:00~

「今朝の献立は……めざして玉子焼き、納豆、味噌汁、白い飯です」

「わあ、良い匂~い。つちぢゅんは、やっぱりお料理上手だね？」

「こつ、こえつー。そんな……も褒めにあずかつ、つつ、嬉しいです……」

「…………」

「…………」

「うわわあ～、やつぱつ、美味しいよ～、つたりやーん。」

「せつ、せせ…あ、あつがつ」やれこやあ

「…………」

「…………」

「うーん、ボクも頑張らなくっちゃーーりっちゃん、ボクにお料理教えてね？」

「...」

」

なぜ…そんなに俺を凝視してくるのかな、フィレナさん！？

「……まあ、今日は休みだしなあ……読書でもするか?」

「はいはーい、勝馬くん、勝馬くん……」

「なんだ、居たんだよ~」

「うん、居たんだよ~」

「で、何か用かな?」

「うそー。」

「なに?」

「うそと、今日お休みでしょ。」

「まあ、一様は……てか、学校に行かないと決めた俺にどうして毎日だけ……」

「じゃあ、2人の愛を深めよ!」

……じゃあの意味が分かりません。

AM11:00~

「はあ、ミツの奴。いきなり、訳の分からぬ事を言つて、抱き着いて来やがつて……びっくりするじゃないか……」

「.....」(汗)

「.....」(汗)

「.....」(汗)

「.....」(汗)

「.....」(汗)

「.....」(汗)

「ん？ フィレナに、勝馬、どうしたのだ？ 2人して、立つたまま微動だにせず？」

……あの時、もしリリアが、偶然にも通り掛かつてくれなかつたとしたら、俺は、一生あのままだつたであらう。まさこ、睨むベビと睨まれたカエルなのである。

PMO:00~

「お皿は…ホットケーキを焼いてみました！ シロップとバターを付けてお食べ下さい」

「うーん、ホットケーキ…」

「……？」

「うーん、ホットケーキ…」

手だなあ……

「いえ、そんな……う、嬉しい……」

「……勝馬は？」

「えつ、なに、ふうちゃん？」

「……勝馬……居ない……」

「ん、そういうば、勝馬の奴、居ませんね？」「ウ様、奴が何処にいるか」「存知ですか？」

「んー、ボクも分からなーいなあ？……どうしたんだろ？？」

「……ふゅ」

「……フイレナも何か元氣、無いですね？」

「……うん、どうしたんだろ？」

トトトテトテ

「……」

ぼてぼてぼて

「……」

トタトタトタ

「……何をしているのだ、フィレナ？」

「……探すの」

「……誰を探してこのだ？」

「……勝馬を探すの」

「なんだ？まだ、帰つて来ていなかアイツ？」

トマトトマト

「……フイーナの奴、なんであんな必死なのだ？」

「（ただこまお…）」

「……」

「（くく、しめしめ、誰も居ない。誰も聞いてない…）」

「……」

「（まあ…フイレンから逃げる為にじょっと外に出してたんだが…）」

「……」

「

「（良かつた、もう、大丈夫みたいだ…）」

「…」

「（後は、フィレナに気付かれない様に部屋に帰るだけだ…）」

「…」

「（籠城用のお菓子やジュースはこいつぱに買つてきたし…）」

「…」

「（……バレない様に、気付かれない様に…）」

トックタ、トックタ、トックタ……がちや……ギギーイ……がちや……

「ふう、あとは鍵を閉めてつと……」

がちゃん

「おひこーーー!」これで、フイレナから解放されたあ……はあ、疲れた  
ゼル……」

がさがれがさ

「……勝馬……」のチヨウを食べて……?」

「ああ、いいよー。てか、あんまり、がさがれがさと我の顔を立てんな  
よ~?」フイレナが聞いて、見つかりでもしたらあ~

「つ

「…… せむせむせむ… ふぬ？」

「あれやつ――つ――!?

「…………… せぬせぬせぬ… 何うひへ？」

ガタガタ、ガタガタ…

「あ、開かないつ！？なぜえーいつ！？」

「……勝馬……カギ、かけた……よ？さつき……」

「…か、鍵、鍵力ギカギ…」

ガチャガチャ、ガチャガチャ、ガチャガチャガチャガチャガ  
チャガチャ……バキッ……

午後3時45分、フィレナと俺の逃げられない檻が完成。

## 再活用（∞）（後書き）

『再活用・鬼のお嫁さん』、まだひとつ、続きます。

……短編集だけの方々には何の事やら分からぬ話ですね（笑）

さて、鬼嫁さん第8話。もはや、ちょっとした連載もの。まあ、△の下手なオオトリにとつて、最終回の無い、この短編集はうやむやの内に終わるといつ絶好の場所なのですが（笑）

『再活用・鬼のお嫁さん』、まだひとつ、続きます。

「……」

神は、もはや、俺を、見放した。

鬼の嫁さん達が来てから、早くも3日目の出来事。とある事情で、俺に多大なるトラウマを植え付けてくれた紫髪の幼げ美少女・フレナ嬢。俺は、その彼女の魔の手から逃れようと部屋へ籠城。

籠城用に、お菓子やジュースといった兵糧は、もちろん確保しており、後は、自室に鍵をかけて籠つてしまえば、完璧な筈であったのだが……。

「……むひい？」

しかし、逃げていた筈の人物は、いま、己の目の前で籠城用のお菓子を食べ漁つていた。

一体全体、これは、如何なる理由か？部屋に入り、鍵をかける所までは良かつた。完璧だった。

だが、気付けばそこに、奴が居る。

「……」

そして更に、事は深刻な事態を迎えていく。

ガチャ…ガチャガチャ…ガチャガチャガチャガチャ…ペキ  
ツ！？

「……

ドアの鍵が壊れ、出入り不可になり、更に、無理矢理にドアをこじ開けようとノブを動かした所。そのあまりにも強かつた力の為にそれは、一瞬にしてただの金属の塊へと化してしまったのであった。

「……ぐすん」

神が悪いのか、俺が悪いのか。鍵だけでは飽きたらずドアノブまで破壊してしまうとは…。

「もう、駄目だ…」

もはや、これまで！？俺はこの状況に覚悟をする。

一度ならず、一度までも俺を不幸のドン底まで陥れたフイレナ。故意か事故か定かにでは無いにしろ。出来つて数日で一生のトラウマを植え付けた彼女と、このまま2人つきりで密室に存在していくと、いう事は己の命の危機にまで発展しかねない。

その為、俺は己の浅はかな脳と行動を悔やみ、死ぬまでの覚悟を決めるのであった。

(……大げさか？)

「ん？ 勝馬くん、帰ってるの？ 部屋のドアが開かないんだけど…」

と、自分の犯した駄目ツブリに嫌気が差した所で、天の助け。緑髪のボク美少女・ミウさんだ。

「助け、助けてくれ！ちょっとした手違いで、ドアの鍵が壊れて、ドアノブまでペツキリと折れちまたた…」

俺は、助かりたい一心で外側に居るミウに必死に助けを求める。

「うわっ！？それは、大変だね？わかったよ、なんとか、こちらからドアを開けられるようにしてみるよ…」

助かった。俺の脳裏には、その言葉が木霊した。

「……はくちゅん…」

と、同時に…

「…?… 勝馬くん? キミの他に誰か別の人気が居るの?」

終わった。といつ、絶望が心を支配したのであった。

「やつ、違つ!」これは、事故だ! あくまで事故!…!」

「…ふうちやんだね? センに面るの…。キミと開かなくなつたキミの部屋に居るのは、ふうちやんだね、勝馬くんつ!…!」

大当たり!

いや、じゃなくて、ミウさん? ちやいますよ? 違いますよ? 貴女のその言葉には、なにか俺が好き好んで、この開かなくなつた部屋にフィレナと2人、引き込もつてこようつに思える感じがするんですが…。違いますよ?

「…何が違うのかな?」

「いや、だつて…」

「出合つて2日の2人が、一緒に布団で寝てて…なあーにが違うの、  
かな？」

「がつー!?

違つ。その事柄に關しては、完全に誤解である。しかし、皆の//  
ウにはその誤解が眞実であり、俺の言葉などまつたくの言い訳にし  
かならず。

「ええーーー? 四の五のといひあるやーーー」

彼女は勢い良く鍵のかかったドアをブチ破る。

「勝馬くーんつ！？」

ドアをブチ破った彼女の顔は真っ赤で、頭はまさに怒髪天。ギラリと光った瞳に怒りに曲げた口からは鬼のそれらしく鋭い牙が覗かれる。

「ね、ホーイ? やひど、ドアが開いたゾー? しかも、翻りとアッサつ……あつがどホー、//わせーん! ?」

俺は出来るだけ明るく//ウに話しかける。とにかく、この事柄から話をズラしたいのだ。

「 しょ・う・ま、くーん？」

しかし、ミウはそれを許さない。いまだギラギラと鋭い眼光で俺を睨み付けている。

「いや、あの、その……」

じどりもじどりに俺はミウから視線をズラし、目を泳がせる。いま彼女と目を合わせようつもにならば、きっと彼女は野生の獣の如く俺に牙を剥ぐであろう。

「……」

「……」

だが、しかし、それではいつまでもたつても沈黙が続くだけ。それは、更に頂けない。なぜなら、そもそも俺のトラウマの一端になつたのは他でもないこのミウトリリアなのだ。

フィレナが俺のベッドに侵入したが為に、ミウトリリアが、何の罪も無いであろう俺に加えた暴行の数々。そもそも、アレがあつたからこそ俺は条件反射でフィレナを恐がる様になつたのだ。

いや、他にも理由があつた様な気がするが、しかし、その大半の

部分をそれが占めている。なので、このままなんのアクションも起さず、ずっと沈黙が保つ事となると痺れを切らしたミウに次に何をされるか分かったものではない。

俺は口の中に溜まつたツバを呑み込み、意を決してミウに話しかける。己の身の潔白を証明する為に…

「そっ、そもそも、俺は悪くない！？」

開口一番、出た言葉がコレである。しかし、これ以上も以下もない訴えであった。まさにこれが真実なのだ。

「そう、そもそもがフィレナの独断で我が寝床に侵入をしていたのだ、ミウさん。故に俺は悪くない！」

「…まあ…？」

俺はこれまでの不満をブチ撒けるかの様にミウに無罪を主張する。彼女は、いきなり演劇の様に言葉を発し、動き始めた俺を怪訝な表情で見詰める。だが、俺はそんな事など気にはしない。

「今回もさうだ、ミウくん！」

びしつ、と立てられた人差し指をミウの鼻先に突き付ける。

「俺は、この部屋に1人で入った。何者も寄せ付けず、だ。しかし、しかしながら、またまた、彼女は、フイレナは、独断で俺の部屋に入つて、居たのだ！！」

そして、部屋の中を闊歩しながら、さながらライギリストの名探偵の如く饒舌に語るのであつた。

「つまり、俺は悪くない！俺は1人、部屋で慎ましく本でも読もうとだな……」

「いよいよ演説の様な釈明も佳境。俺は両手を振り上げ、身をよじり、戯曲の如く体を踊らせる。

「いいか!? つまり、俺はフィーレナとは何もない」

と、その時、ふと俺の足に何か生温かい感触が走る。

「…い、ん?」

「…ふゅ」

果たして、それは紫髪の幼氣美少女・フィーレナであり、彼女は俺が買ってきた大量のお菓子を胸に抱き抱え、俺の足にすり寄つていった。

「あれつー? えつと、フィーレナさん?」

「…………の、まさかの出来事。いま、まさかの身の潔白と周りの誤解を説かんとする『名探偵・俺』の足元に原因で事の発端であるフイレナ嬢がベッタリと抱き着いてきたのだ。

「…………ほう……で、勝馬くん?つまり、誰が何の話だったかなあ?」

「いや、ちがい……違いますの、ミツ様……」

バチバチとその鬪氣ならぬ怒りを具現化して、身体の周り中に電撃を走らせるミツ。もはや、釈明も何もあつたものじやない。

「……お菓子いっぱい……フイレナの為…勝馬、優し……好き…」

「……な、なにいつー?」

更に、フイレナの根拠のない勘違い。そして、そのフイレナの勘

違ひな言動をスイッチに

「「おのつ、スケコマシ野郎オオオーッ！？」

遂には、ハチキレたミウが俺の体を掴み、グルングルンと振り廻し始める。

「だだだだつ、ちがががつ、ぐぐぐつ……ゴバアアアアーッ！？」

必死にこの更なる誤解に俺は否定の念を告げようとするのだが、ミウのあまりにも強力な振り回しの力に極度の重力がかかり、俺の前は真っ暗になる。所謂、ブラックアウトという現象である。

「ヌハアアアアアーンッ！？」

：それから、どれくらいの時間が経っていたのだろうか。再び、俺が見えなくなつた眼を見開いて気が付いた時

何故か俺は、庭先の木に頭を突っ込んでいた。

「……お、おお、おれは……む、無実……だ」

庭木に頭を突っ込み、夜風に吹かれ、一人呟く哀れな男。結局、どう足搔こうと遠吠えも叶わぬ最悪な結末を迎えた俺なのであった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4070e/>

---

オオトリ短編劇場

2011年1月2日13時57分発行